

# 1984年9月6日のババの御講話

## 妬みと憎しみは致命的な悪徳

サルヴァットラ サルヴァーニ ブーターニ デーヒ  
(デーヒはすべての人間に宿っている)

体は、はかないものです。デーヒ〔体に宿っている者〕は、永遠であり、真実です。デーヒは体〔デーハ〕に宿っているからデーヒと呼ばれているわけではありません。全宇宙は神の体であり、それゆえ、デーヒという名前は宇宙意識に付けられたものです。

アートマという不変なる実体の特質を悟るためには、シャーストラ（古代の諸経典）の引用を探し出すだけでは十分ではありません。アートマをシャーストラによって悟ることはできません。神我の悟りは、シャーストラの引用を根拠に据えた、まさに自分自身の真剣なサーダナ（霊的な努力）によって得なければなりません。ヴェーダ、ウパニシャッド、シャーストラ、プラーナは、どれも指標の役目を果たしており、人がとるべき方向を指し、人が到達しようとするべき最終目的地を示していますが、その旅路は自分自身が歩かねばなりません。

ギーターの二章〔11節〕の教えは、「アショーチャーン アヌヴァショーチャストヴァン」(そなたは嘆くべきでないことについて嘆く)というクリシュナの言葉で始まります。この声明から、ギーターは徐々に悲しみを取り除く方法を明かしはじめます。クリシュナはアルジュナに言います。「そなたは嘆くべきことでないことについて嘆いている」と。

### 主が愛しく思う帰依者

全世界のすべてのものは、五つの特質を持っています。それは、在ること（アスティ）、輝き（バーティ）、愛好（プリヤム）、姿形（ルーパム）、名前（ナーマム）です。初めの三つの特質、アスティ（在ること）、バーティ（輝き）、プリヤム（愛好）は、サット（存在）、チット（意識）、アーナンダ（至福）とも呼ばれています。この三つの属性は永遠のものであり、それゆえ神です。これらには生も死もありません。けれども、姿形と名前は人が作ったものです。これらは人の産物なので変化を免れません。姿形と名前は一家の親戚のようなものです。親戚はずっとその家庭の一員であるわけではなく、やってくるには去っていきます。それと同じように、喜びと悲しみも家族の親戚であり、来ては去ります。そうした過ぎ行く関係を永遠のものだと思ってそれらに永遠に執着することは、間違っています。それらの関係は変化と消滅を免れません。そうした関係を失って嘆くのは、正しいことではありません。

そうした関係のはかなさと嘘をわかるには、どうしたらよいのでしょうか？ バガヴァンは、ギターのパクティ ヨーガ（信愛によって神と一つになること）を指し示しています。そこに述べられている26の善良な性質を育んだ人は、神にとって愛しい人です。26の性質全部を育む必要はありません。火を灯すには一本のマッチで十分です。霊的な気づきを得るには、主が言及した性質のうちの一つでも十分です。もしギターに言及されている重要な善良な性質のいくつかを自分の霊的努力の土台にすれば、人生に大きな変容が起こるでしょう。

善良な性質を育てることには、悪い性質のすべてを取り除くことが伴います。悪い性質の中でも特に望ましくない性質が二つあります。それは妬み（アスーヤー）と憎しみ（ドゥエーシャ）です。この二つの悪い性質は、二人の共犯者のようなものです、あらゆる行いにおいて、一方がもう一方を助けたり、けしかけたりします。妬みは、木の根を蝕む害虫です。憎しみは、木の枝や葉や花を蝕む害虫です。この二つがいっしょになると、きれいな花が咲いている木も完全に殺られてしまいます。

それと同じように、妬みは人を内側から蝕みます。それは目には見えません。一方、憎しみは表立って現れます。妬みという悪徳を持っていない人はめったにいません。妬みはほんのささいなことに対して生じることもあります。そして、妬みから憎しみが生まれます。

### **憎しみを取り除くにはいつも愛を実践していなさい**

憎しみを取り除くには、いつも愛を実践していなければなりません。愛のあるところには妬みと憎しみの余地はなく、妬みと憎しみのあるところには本当の至福（アーナンダ）はありません。この至福は美しさをまとって現れます。よく言われることですが、「美しいものはつねに喜ばしい」ものです。もし何であれ美しいものを見たら、あなたはそこから喜びを得ます。けれども、人が追い求めるべき美しいもの、永遠の喜びの源とは何でしょう？ 神こそが美の化身であり、永続する喜びの源です。

帰依者の第一の義務は、神の美を黙想することで得られる、歓喜の甘露を追い求めることです。それほどの歓喜を味わうための方法は、善良な性質を育て、悪い特質を捨て去ることです。アルジュナはクリシュナのメッセージを聞きましたが、その意味を完全には消化していませんでした。たとえば、クルクシェートラの大戦争の時のことです。ある日、ビーシュマの率いる軍勢とアルジュナの率いる軍勢との決戦がありました。ビーシュマはその決戦で倒れました。アルジュナは、クリシュナへの信愛があつたにもかかわらず、ビーシュマに勝利したのは自分によるものだと思っていました。

### **神は帰依者を守ると誓っている**

日が沈むと、クリシュナとアルジュナは馬車でアルジュナの陣営に戻りました。アル

ジュナはクリシュナに、馬車を降りて陣屋に行くよう求めました。アルジュナは自惚れて、馬車の主人は自分であり、クリシュナは御者にすぎないと思っていたのです。慣習では、まず御者が馬車を降りて、それから馬車の主人が降りることになっていました。アルジュナが何度クリシュナに先に降りるよう求めても、クリシュナはアルジュナが先に降りるべきだと言いました。アルジュナは翌日の戦いにもクリシュナの助けを必要としていたので、クリシュナとの不愉快な言い争いを避けるために、結局、自分が先に馬車から降りました。

クリシュナはアルジュナにすぐに陣屋に入るよう求め、アルジュナが中に入ってからクリシュナは馬車から飛び降りました。そのとたん、馬車は炎に包まれました。それを見て、ユディシュティラとアルジュナはクリシュナにその不測の出来事の原因を尋ねました。クリシュナは答えました。

「神性の特質を理解できる者、神の戯れを理解できる者は誰もいない。神に利己心はまったくない。神は帰依者を守ると誓っていて、それを貫いている。今日の戦闘でビーシュマがそなたを狙って放った致命的な矢の数々はすべて、私がずっと自分の足で踏みつけていた。だから、それらの矢がそなたに危害を及ぼすことはなかった。もし私が先に馬車から降りていたら、それら致命的な矢の数々がそなたを灰にさせていただこう。そなたはその真実を知らず、私を先に馬車から降ろしたかった。」

このクリシュナの言葉を聞いて、アルジュナは自惚れを捨てました。

### 妬みのさまざまな形とその報い

妬みは、神の過ちを探すという形でさえ現れます。妬みはさまざまな形で現れます。もし誰かが自分より良い評判を得たら、その人への妬みが生じます。自分よりもハンサムな人を妬む人もいます。学生は試験で自分より良い点数を取った人のことも嫉妬します。嫉妬深い人は、自分より良い境遇にいる人、自分より顔立ちが良い人、あるいは、自分より成功している人を見ることに耐えられません。これは人間の弱さの印です。

ひとたび妬みが人の心に根を張ると、それはしだいにその人の業績のすべてを破壊していきます。妬みは鬼のような性質を助長します。妬みは人の人間性を失わせます。妬みは人を動物の状態に落とします。嫉妬にはとんでもなく邪悪な傾向があるので、最初に芽が出た時にその根を引き抜いてしまうべきです。皆さんは、人の繁栄や幸せを喜ぶことを身につけなければいけません。それは大きな美德です。それはバガヴァッドギーターの教えの一つです。バガヴァッドギーターの九章で、クリシュナはアルジュナに言いました。

「おお、アルジュナよ、妬みという悪をなくしなさい。嫉妬心のない人間（アナスーヤカ）になりなさい。」

嫉妬心のない人は、神を小さな赤子に変えることができます。これはアナスーヤカの話で実証されています。ブラフマー神とヴィシュヌ神とマヘーシュワラ神がアナスーヤカの貞節と純潔を試しに来た時、三神はアナスーヤカの純潔の力によって赤ん坊に変えられました。

〔アトリ仙には貞女の誉れ高いアナスーヤー（嫉妬心のない者の意）という名の妻がいた。その評判があまりにも高かったので、サラスワティー女神とラクシュミー女神とパールヴァティー女神は、それが誠か否か、夫たちにその貞節を試してもらうことにした。ブラフマー神とヴィシュヌ神とマヘーシュワラ神は、アトリ仙の留守に、客人に変わってアトリ仙の庵を訪れて、アナスーヤーに食事を出してほしいと頼んだ。アナスーヤーが食事を用意して持っていくと、三人はアナスーヤーに服を脱いで食事を出してくれたら食事を食べると言った。アナスーヤーは、客人をもてなすというダルマと、貞女のダルマの両方を守るために、三人が赤ん坊の姿になるように念じると、貞女の力によって三人は赤ん坊の姿に変わり、アナスーヤーは裸になって赤ん坊に食事を与えた。三女神は、赤ん坊の姿に変えられた夫たち三大神を元の姿に戻して欲しいとアナスーヤーに頼み、アナスーヤーはそれに応じた。三大神はアナスーヤーとアトリ仙を祝福し、三位一体の化身として二人の子として生まれてくるという恵みを与えた。〕

妬みをなくすことによって、人は浄性・激性・鈍性を克服することさえできます。妬みは他人を害するだけでなく、自分自身も害します。なぜなら、妬みでいっぱいの方は、夜も眠れず、食事もうを喉を通らなくなるからです。妬みは結核のように人を内側から弱らせます。妬みは今のカリユガに広まっている消耗性疾患です。人が不安の餌食になっているのは、妬みのせいです。

### 仏陀が信徒に教えたこと

ある日、仏陀は托鉢に出かけ、多くの信徒が住む村に向かいました。その途中、よこしまな連中が仏陀の前に現れて、さまざまに悪口雑言を浴びせました。仏陀は歩みを止めて近くの岩の上に腰を掛け、自分を中傷する者たちに言葉を掛けました。

「かわいい子らよ、私を罵（ののし）ることでどんな喜びが得られるのかね？」

それに対して、悪漢たちはその訳を答えることもせず、もっとひどい言葉で仏陀を罵り続けました。仏陀は、「私を罵ることが嬉しいなら、楽しい時を過ごすのがよい」と言って、腰を下ろしました。

そのうち、悪漢たちは罵ることにくたびれ果てて、帰ろうとしました。その時、仏陀は言いました。

「私がずっとここに座っていた訳は、もし私が村に入り、そなたらが村人たちの前で悪態をついたら、村にいる私の信徒たちがそなたらを許しておかなかつたらからである。私がそなたらの悪態の一切に耐え、そなたらを好きにさせて、ここに留まったのは、そなたらとその災難から救うためであった。

人を喜ばせようと思ったら、多くのことをなさねばならず、多額の金銭を使うことさえしなければならぬ。今日、私はまったく金銭を使わず、また、何の苦勞もせずに、そなたら皆をおおいに喜ばせることができている愉快である！ 今日は何んという良い日であろう！」

と、仏陀は感嘆の声を上げました。

「そなたらは私を罵ることで喜びを得た。それゆえ、私はそなたらの喜びの因となったのである。私はそれによってそなたらに満足を与えた。多くの者は、人々に慰めと幸せをもたらすために、礼拝堂を建てたり、井戸を掘ったり、その他の慈善行為をする。しかし、私は何一つそうしたことを行わずして、ここにいる悪意ある者たちに大きな満足を与えることができた。これは実に偉大な成果である。」

仏陀はこのように見たのです。

## 妬みは我が身をむしばむ害毒

仏陀はまた、悪漢たちにもう一つ教訓を痛感させました。仏陀は悪漢の一人に尋ねて言いました。

「我が子よ！ 乞食がそなたの家に物乞いに来て、“祝福されし母よ、食べ物を恵み給え！”と請い、そなたが何か食べ物を持ってきたとする。もしその乞食が、“これは私が請った施し物ではない。だから、これは受け取れない”と言ったら、そなたはどうするかね？」

その男は「その施し物を引っ込めるさ」と答えました。仏陀は次のように言いました。

「それと同じように、そなたは悪口雑言という施し物（ビクシャ）を私に与えようと試みた。私はそれを受け取らなかった。その時、それはいったい誰のものとなるのか？ それはそなたのもとに留まる。ゆえに、そなたが罵ったのは私ではなく、実に、そなた自身なのだ。」

もし誰かに宛てた書留の手紙があって、相手はその受け取りを拒否したら、郵便局はその手紙を出した本人に返送します。それと同じく、もしあなたが誰かを非難したり、憎んだりしても、相手が動揺せずに落ち着いていたら、あなたの非難や憎しみは、あなたのところに返ってきます。妬みや憎しみは、それが向けられた相手に対してよりも、妬みや憎しみの感情を抱いた本人に、大きな害を及ぼすのです。妬みは我が身をむしばむ害毒です。

## 賢者とエゴの話

昔、ある賢者が、多様な美しい花と果実の育つ美しい庭を造っていました。その賢者の中にさえ、エゴが頭をもたげ、妬みが目覚めて根を張りました。エゴと妬みの二つを持った時、憎しみもその邪悪な輩（やから）に加わりました。それを見た神は、サフラン色のローブ〔出家の壊色の衣〕を着て一切の執着を捨てたと主張する者がそのような邪悪な特質を抱くべきではない、と思い、年老いたブーフマナ〔婆羅門〕の姿に変じて、賢者の庭に入っていました。

そのブーフマナは、木を見てその美しい花と果実を称賛しました。そして、このすばらしい庭をこしらえた者は誰かと賢者に尋ねました。賢者は答えました。

「おお、尊きブーフマナよ、この庭は私が根気強く努力して造り、日夜、どの草木も

我が子と思い、世話をしております。どの木も私が植え、私が育てました。この庭の剪定と配置はすべて私の手仕事です。」

それから、賢者は誇らしげに言いました。

「全部私の仕事です。私の業績です。どの花も果実も、私が人のために育てております。」

ブラーフマナはその場を去り、それからしばらくして、一頭の雌牛が庭に入ってきました。その牛は庭の花々を荒らしはじめました。少し離れたところでそれを見た賢者は、大きな木切れを牛に投げつけました。それを受けた牛は、その場で死んでしまいました。賢者は、自分は牛殺しの罪に問われるのではないかと心の中で恐れしました。

そうこうしているうちに、年老いたブラーフマナが戻ってきて、牛が死んでいるのを見て声を上げました。

「なんということだ！ この哀れな牛を殺めることなど誰にできたのか？」

賢者は答えました。

「すべては神のご意志です。神が意志しなければ、たとえ誰かが牛を殺したいと思っても、牛が命を失うことはありませんか？」

ブラーフマナは即座に言いました。

「そなたは自分がこの庭を育て、花を咲かせたといった。しかし、牛が死んだら、死んだのは神の責任だというのか？ そなたは、良いことはすべて自分の功績だと主張し、何か不幸なことが起こると神のせいにする。そなたの自惚れは、まったくもって見苦しい。」

それからブラーフマナは、自らの正体を明かして言いました。

「私はブラーフマナではない。私はまさに、そなたに根を張ったエゴを取り除くために、この姿をとったのだ。」

## 神を体験するには自分を愛で満たしなさい

誰もが自分のエゴと妬みと憎しみを取り除く努力をすべきです。これらの除去は、ただ書物を学んでも成功しません。それには不断の努力が必要です。愛を育て、すべての行いを神に捧げることによって、それらの邪悪な特質を取り除かねばなりません。ほんのわずかでも妬みが残っているかぎり、それが自分の中にある良い性質をすべて破壊してしまうでしょう。だからこそギターは、妬みを完全に除去することが、サーダカ（霊性の求道者）に第一に必要とされる、と教えているのです。

毎日の生活が、徳を育むこと、そして、霊的努力を促す環境を整えることによって律されている時にのみ、神我顕現の意味をつかみ取ることが可能になります。パラマトマは微細であり、すべてにみなぎっています。その輝きはすべての場所にあります。このホールには光があります。この光の源は何ですか？ それはどこかで灯っている電灯です。白熱灯には形があります。しかし、そこから生じる光には形がありません。アートマは輝きを有していますが、形も名前もありません。アートマはどんな名前でも形でもとることができます。形と名前はアートマによって維持されています。

電球は光をもたらします。扇風機は風を作ります。さまざまな機械が電気で動きます。そうした器具の形と機能は多種多様です。けれども、それらを動かす力は同一です。それと同じように、アトマ原理は無数の存在の唯一性を明示しており、それぞれの存在の中でさまざまな形と名前をとっています。さまざまなワット数の電球が、違う目的でそれぞれの務めを果たしているのと同じように、生き物の間にも違いがあります。けれども、異なる電球を流れる電流は、どれも同じです。それぞれの電球から生じる光の量の違いは、電球の容量の違いによるものです。それと同じく、愛でいっぱいの方は明るく輝きます。愛に乏しい方は薄暗い電灯のようです。もっと明かりを得るには、電流ではなく電球を替えなければなりません。

### 無知で目が見えなくなるよりも死ぬほうがまし

神は愛の化身です。もしあなたが神を体験したいと望むなら、あなたを愛でいっぱいにすることです。愛の化身である神を体験することができるのは、愛によってのみです。妬みと憎しみでいっぱいの方は、どれだけ太陽が明るく輝いていてもそれが見えない盲人のようなものです。盲人は、どれだけ神が近くにいても神を見ることができません。妬みと憎しみでいっぱいの方は無知によって盲目になり、自分の近くにあるものを手探りで探す盲人のように、神を見ることが望めません。真実、愛、妬みとエゴと憎しみがないこと、といった良い性質でいっぱいの方は、神を探さずとも神を見ることができます。その方はグニャーニ（霊的英知の人）となります。よく言われるように、無知で目が見えなくなるよりも死ぬほうがまし、です。

学生諸君は、若いうちに自分の人格と行いを向上させなければなりません。ですから、妬みなどの邪悪な特質に余地を与えるべきではありません。学生諸君は、他の学生が勉強やスポーツがよくできた時、嬉しく思わなければいけません。一番になった学生を妬ましく思うことには、三重の罪があります。一番目の罪は自分が勉強していないこと、二番目の罪は自分よりできる学生に妬みを抱くこと、三番目の罪は自分の失敗を嘆くことです。学生諸君はそうした狭い考えを持つべきではありません。学生諸君はドゥルヨーダナの運命から教訓を得るべきです。パーンダヴァ兄弟への憎しみと妬みのせいで、ドゥルヨーダナは自分と一族に完全な崩壊をもたらしました。

1984年9月6日

プラシャーンティ ニラヤムのマンディルにて  
Satnya Sai Speaks Vol.17 C19